



TITLE:

朱子の氣象學 - 朱子の自然学その三 -

AUTHOR(S):

山田, 慶兒

CITATION:

山田, 慶兒. 朱子の氣象學 - 朱子の自然学その三 -. 東方學報 1971, 42: 209-243

ISSUE DATE:

1971-03-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/66470>

RIGHT:

朱子の氣象學

朱子の自然學 その三

山 田 慶 兒

一 氣象學の原理

- 1 陰陽と氣象
 - 2 陰陽の諸相
 - 3 易のパターン
- 二 氣象現象の成因

- 1 土地と氣候
 - 2 いくつかの現象
 - a 先人の説
 - b 雨
 - c 雲
 - d 雷
 - e 風
 - f 霜・露・霧
 - g 雹・雪
 - h 虹
- 三 合理主義の陷穽

一 氣象學の原理

1 陰陽と氣象

朱子の自然學は、存在の四つのカテゴリーをもつ。一氣・陰陽・五行・萬物である。陰陽は、氣象學においてはじめて、理論構成にかかせないカテゴリーとして、現われてくる。

一般に、中國の自然學は、不斷に萬物を生みだす「生生不息」(易・繫辭傳)の造化の働きを、氣の本質として、あらかじめ前提している。氣とは造化の働きをする基底的存在である、と逆に定義してもいい。陰陽はもともと、その造化にかかわる概念であった。「天地網緼シテ、萬物化醇シ、男女精ヲ構セテ、萬物化生ス」(易・繫辭傳)ということばが端的に示すように、造化

とは男性的なもの、陽と女性的なもの、陰との相互作用にほかならぬ。それが古來の觀念であつた。周濂溪の太極圖說にも、それはあからさまに表現されている。太極が陰陽に分かれ、陰陽から五行が生まれ、それらが「妙合シテ凝リ、乾道男ヲ成シ、坤道女ヲ成シ、二氣交感シテ、萬物ヲ化生ス」と。いうまでもなく、それは、生物をモデルにして自然を認識する、もつと詳しくいえば、生命の生・長・老・死の過程とおなじそれをあらゆる自然現象がたどるとみなす生物態的發想法に、由來する。むろん、氣象現象もまた、その例外ではなかつた。陰陽による氣象現象の説明は、漢代に原型ができあがるのだが、そのばあい常に、易の表現をかりれば、「男女構精」のイメージがつきまといつていた。極端な例を一つだけあげるなら、蔡邕の月令章句にいう。

虹ハ蜺蜺ナリ。陰陽交接ノ氣ノ形色ニ着ケル者ナリ。雄ヲ虹ト曰イ、雌ヲ霓ト曰ウ。⁽¹⁾

造化の働きが直接に觀察されるのは、もちろん生物現象においてである。氣象現象とそれとのあいだには、明確な對應關係がある。禮記・月令のことばにしたがえば、「天氣下降シ、地氣上騰シ、天地和同シテ、草木萌動ス」のだから。それが氣象現象を生物現象のイメージでとらえさせる大きな要因、すくなくともその一つであつたろうことは、推察にかたくない。しかし、そのあまりにも安易な類比が、氣象學の理論的な展開の道をとざしてしまう。

朱子が氣象學の理論構成に陰陽のカテゴリーをくみいれる觀點も、やはり造化にあつたことは、ほとんど疑いをいれぬ。これは端的に、こう表現する。

天地ノ間ニ盈テ造化ヲ爲ス所以ノ者ハ、陰陽二氣ノ終始・盛衰ノミ。⁽²⁾
造化が生物モデルであつたのも、やはり確かだ。

陰陽でないものはない。乾坤から至微至細、草木禽獸にいたるまで、やはり牡牝・陰陽をもつ。⁽³⁾

そのかぎり、傳統的な觀念のうえにずっしりのつかつていた、といえよう。にもかかわらず、かれがあからさまに陽を男性的なもの、陰を女性的なものとして表現したり、その生のイメージを手がかりにして思考をすすめたりすることは、決してなかつ

た。というよりも、かれはそれを自覺的に拒否した。朱子は、陰陽を連續的な流體としての氣のイメージに、溶解させてしまふ。かれの努力はそこにそがれ、そこからかれの獨創性がほとばしりでるのだ。

一氣は連續的な流體であり、その作用もまた連續的であつた。連續的な存在の連續的な作用によつて生ずる一氣の二つの部分を比較して、動靜および輕重の觀點からとらえるとき、それらは陰陽とよばれる。そのかぎり、上位概念である陰陽を、下位概念である一氣の動靜・輕重、あるいはおなじことだが消長、と置き換えても、上位概念の内包に失われるものはない。のみならず、朱子はしばしば、陰が陽の缺除態にすぎないのを、強調するのだ。ここでわたしたちは、パラドックスにぶつかる。存在と認識のパラドックスである。それがパラドックスであるのを、わたしは率直に承認しよう。朱子にとつても、おそらくそうであつた。しかし、それとの格闘とおして、かれの氣象學はきずかれていったのである。

朱子の氣象學説を再構成するのに必要なかぎり、まだ論じていない側面に焦點をしぼりつつ、その陰陽論を検討しておきたい。

2 陰陽の諸相

陰陽はあくまで一氣である。

陰陽は一氣にすぎない。陽の退くことが陰の生ずることであつて、陽が退いてしまつてからべつに陰が生ずる、⁽⁴⁾ということがあるのではない。

それを一氣の進退とみるか、陰陽二氣とみるかは、觀點の相違にすぎぬ。

陰陽は一つとみなすこともできるし、二つとみなすこともできる。二つとみなせば、「陰ニ分カレ、陽ニ分カレテ、兩儀立ッ」(太極圖說)である。一つとみなせば、一つの消長にすぎない。⁽⁵⁾

認識論の立場からでなく、存在論の立場にたてば、それをつぎのように表現することができる。

だいたい陰陽は一氣にすぎない。陰氣が流行すれば陽となり、陽氣が凝聚すれば陰となる。眞つ向から對立する二つのものがあるのではない。⁽⁶⁾

流行ということばは、發散と置き換えてもいいだろう。氣の凝聚と發散、それが陰陽である。氣象現象の説明の原理がひとつ、そこにあたえられる。ところで、いったん存在を陰陽としてとらえる觀點にたてば、

すべては陰陽であつて、陰陽でない物はない。⁽⁷⁾

存在として一つの物が陰、あるいは、陽である、ということにとどまらない。陰陽は比較概念であつた。したがつて、

一つの物にはちゃんとそれぞれ陰と陽がある。たとえば人の男女は、陰陽である。人の體についても、それぞれこの血氣があり、血が陰で氣が陽である。たとえば晝夜の間は、晝が陽で夜が陰であるけれども、晝の陽は午の刻からはさらに陰に屬し、夜の陰は子の刻以後はまた陽である、それが、陰陽はそれぞれ陰陽の象を生む、ということなのだ。⁽⁸⁾

かくて、天文学の分野に屬する諸現象も、つぎのように把握しなおされる。

天地は全體として一つの大きいなる陰陽である。一年にも一年の陰陽があり、一月にも一月の陰陽がある。一日・一時もみなそうだ。⁽⁹⁾

この把握が氣象學にどうかかわってくるかは、さきに引用した月令の「天氣下降シ、地氣上騰ス」と重ねあわせれば、容易に推察できる。それについては、もすこしあとで、詳しく考えることにしよう。

朱子によれば、二元的なもの、あるいは、陰陽は、存在の二つの相をもつ。

天地間の道理には、局定するものがあり、流行するものがある。⁽¹⁰⁾

というのがそれである。「局定するもの」はべつに「定位するもの」・「對峙（待）するもの」・「相對するもの」ともよばれ、「流行するもの」は「推行するもの」・「錯綜するもの」ともよばれる。

陰陽には流行するものがあり、定位するものがある。「一動一靜シテ、互ニ其ノ根ト爲ル」（太極圖說）のが、流行するもの

である。寒暑・往來がそうだ。「陰ニ分カレ、陽ニ分カレテ、兩儀立ツ」(同)のが、定位するものである。天地・上下・四方がそうだ。「易」には二つの意味がある。一つは「變易」で、それが流行するものであり、一つは「交易」で、それが對待するものである。魂魄は、二氣でいえば、陽が魂であり、陰が魄である。一氣でいうならば、伸びるのが魂となり、屈するのが魄となる。⁽¹¹⁾

この二つの相が易の解釋に結びついていることは、程伊川の易傳を批判したつぎのことに、明らかである。

陰陽には相對しているものがある。たとえば東陽西陰・南陽北陰がそうだ。錯綜しているものがある。たとえば晝夜・寒暑、一つは横一つは直がそうだ。伊川が「易ハ變易ナリ」(易傳・卦)というのは、ただ相對するもの(錯綜するものの記錄者による書きあやまりであろう)としての陰陽が流轉するのを説いているにすぎない。錯綜するもの(おなじく、相對するものあやまりであろう)としての陰陽が交互する道理を説くのではない。「易」を語るなら、この二つの意味を兼ねなければならぬ。⁽¹²⁾

易と陰陽の關係については、あとで論じよう。陰陽のこの存在の相について注目すべきは、つぎの二點である。第一に、陰陽には對立と循環の二つの相がある。朱子はべつにいう。

陰陽には、相對しているものがある。たとえば夫婦・男女・東西・南北がそうだ。錯綜しているものがある。たとえば晝夜・春夏秋冬・弦望晦朔・一つの期間にひとまわりするのがそうだ。⁽¹³⁾

第二に、氣の理論としては、循環は一氣の觀點に、對立は二氣の觀點に、それぞれ結びついている。そのことはさきの魂魄の説明にも示唆されているが、つぎのことにいっそう明瞭である。

陰陽の推行するものは、ただ一つにすぎぬ。對峙するものならば二つだ。たとえば日月・水火の類が二つだ。⁽¹⁴⁾

ひるがえって、天體の運動(とくに太陽の運動)は、それが氣象現象をひきおこすのだが、一氣の循環の相にあたること、したがって、氣象學に固有な存在の相として要請されてくるのは、對立の相であるのがわかる。事實、朱子は主として、氣候の年周變化を循環の相において、局所的な氣象現象を對立の相において、説明してゆくのである。

一言つけくわえておくから、朱子はこの二つの相に體用の論理を適用している。そのことが、さきにわたしが一氣と陰陽についてのべた解釋の妥當性を、傍證する。すなわち、朱子はいう。

體は天地に後れて在り、用は天地に先んじて起る。對待するものは體であり、流行するものは用である。體は靜で、用は動だ。⁽¹⁵⁾

循環するものとしての陰陽すなわち一氣は、天地の形成に先んじて作用し、對立するものとしての陰陽すなわち二氣は、天地の形成の後にはじめて存在する。宇宙論や天文學が一氣の理論であり、氣象學が陰陽の理論であるゆえんが、そこにある。のみならず、陰陽が體、つまり、存在とされるところに、氣の作用(すなわち、造化の働き)をとおして措定されたものであることが、まぎれもなく示されているのだ。

陰陽の作用に、眼を移そう。朱子によれば、陰陽は兩立しない。

天地の間に、兩立の道理はない。陰が陽に勝つのでなければ、陽が陰に勝つ。どんな物でもそうだし、どんな時でもそうだ。⁽¹⁶⁾

この主張が張横渠の説にもとずいているのは、つぎのことばからわかる。

横渠が「陰は聚め、陽は必ず散らす」とのべている一節で、ぴたりと陰陽の情がわかる。⁽¹⁷⁾

勝つとはどういうことか。どうして兩立しないのか。横渠は正蒙・參兩篇のなかで、つぎの原理を提出したのである。

陰の本性は凝聚、陽の本性は發散である。陰は聚め、陽は必ず散らし、その勢は均しく散らす。⁽¹⁸⁾

凝聚させる力が發散させる力よりも強いばいに、陰が陽に勝つ、という。その逆なら、陽が陰に勝つのである。さらに王夫之の注によれば、陰が陽を内に包んで凝聚すると、陽は陰をもいっしょに發散させてしまう。したがって、「兩立ノ理」はありえない。これが作用の第一の原理である。陰陽の對立の相において、とりわけこの原理は働くであろう。

作用の第二の原理、すなわち、陰陽の循環の相において働くそれは、感應である。易・繫辭傳にいう。

日往ケバ則チ月來タリ、月往ケバ則チ日來タリ、日月相推シテ明生ズ。寒往ケバ則チ暑來タリ、暑往ケバ則チ寒來タリ、寒暑相推シテ歲成ル。往クトハ屈スルナリ、來ルトハ信ビルナリ。屈信相感ジテ利生ズ。

朱子のいわゆる「推行するもの」がこのことばにもとづくのは、あらためて指摘するまでもあるまい。程伊川は、易傳において、感應の原理をつぎのように一般化する。

感ハ動ナリ。感有レバ必ズ應有リ。凡ソ動クコト有レバ皆感ヲ爲ス。感ズレバ則チ必ズ應有リ。應ズルトコロ復タ感ヲ爲ス。感ズルトコロ復タ應有リ。已マザル所以ナリ。

伊川のこのことばは、朱子と弟子たちのあいだで、くりかえし話題にのぼった。朱子語類・卷七十二に、その對話をいくつも記録する。朱子によれば、易の屈伸は伊川のいう感應にほかならぬ。のみならず、太極圖說の一動一靜も「感應ノ理」である。

器之（未詳）がたずねた。程先生は感通の理を説いていますが？

（先生は）いわれた。晝から夜、夜からまた晝になるみたいに、循環して窮まるところがない、いわゆる「一動一靜、互ニ其ノ根ト爲ル」のは、すべて感通の理なのだ。⁽¹⁹⁾

つまり、陰陽の循環の相をうみだす原理が感應なのであり、その意味で、およそ天地の間にあつて、感應の理でないものはない。造化と世間のことはみなそうだ。⁽²⁰⁾

といつていい。べつにかねは感應を「必然ノ理」ともよぶ。感應とは事物間のつぎのような關係をさす。

（弟子が）たずねた。程先生が感應を説かれ、學生はつねひごろそれを口にしますが、いかがでしょう。

（先生は）いわれた。ただこの一つのことさらに因つて、さらに一つのことさらに生みだす、それが感と應だ。第二のことさらに因つて、さらに第三のことさらに生みだす。第二のことさらに感であり、第三のことさらに應である。⁽²¹⁾

これは、たとえばヒュームのいう因果律とほとんど相覆う概念であるかにみえる。しかし、部分的には因果關係をもふくむ、

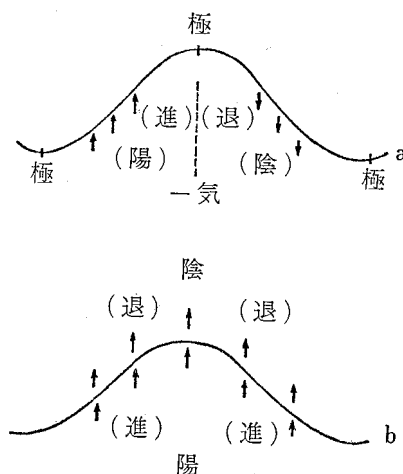


図1 氣の波動モデル

まったくことなつた概念であるのは、たとえばつぎの問答に明らかである。
 林一之がたずねた。「凡ソ動クコト有レバ皆感ヲ爲ス。感ズレバ則チ必ズ應有リ」とは？

(先生は) いわれた。たとえば風が吹くのは感であり、樹が動けばそれが應である。樹がゆれるのも感であり、下のほうの物が動くのも應である。たとえば晝が極まれば必ず夜が感じてやつて来るし、夜が極まってもやはり晝が感じてやつてくる。⁽²²⁾

季節の變化は、この感應の作用によつておこる。

春秋冬夏は感應作用にすぎず、「應ズルトコロ復タ感ヲ爲シ、感ズルトコロ復タ應ヲ爲ス」のである。春夏は一つの大きいなる感であり、秋冬が必ずそれに應じて、しかも、秋冬も春夏の感となる。詳しくいえば、春は夏の感となり、夏が春に應じて、さらに秋の感となる。秋は冬の感となり、冬が秋に應じて、さらに春の感となる。だから、窮まるところがないのである。⁽²³⁾

これを陰陽の作用におきかえれば、そのまま氣候の年周變化の説明となるだろう。

聚散の原理を、わたしはいちおう、感應のそれから切り離してのべてきた。しかし、両者は密接に相關連しているというだけでなく、聚散を感應の原理の局所的表現とみなすこともできる。たとえば感としての陽に陰が應じる、その陰陽の接點において聚散の原理が働く、と考えられるからである。のみならず、連續的な流體である氣の作用のパターンが波動型であるのに着目するならば、両者は一つの原理のことなつた表現にすぎないのがわかる。氣の作用の波動モデルを、一氣および陰陽の觀點からえがいたのが、圖1である。aは循環の相を、bは對立の相を、それぞれあらわす。海岸の寄せては返す波を想起しよ

う。その波を垂直面で切ったのがaであり、水平面で切ったのがbである。要するに觀點の相違にすぎぬ。すでに賢明なる讀者は、聚散がいわば一氣の聚散（すなわち、凝聚力と發散力）として、感應がまさに陰陽の感應として論じられたこと、それがこの圖とは逆の表現になっていること、に氣づかれたであろう。兩者はついに一つの原理にほかならないのである。

3 易のパターン

陰陽の理論は、易をはなれてありえない。これまで論じたことから、それは理解されよう。だが、朱子の氣象學が一般に易の理論にささえられている、というだけではない。かれは、易における陰陽のパターンから、陰陽の存在のある構造的なパターンをひきだし、それによって、氣候の年周變化を説明する。理論構成においてそれがしめる位置は、宇宙論の九重天說および元會運世說に對應するものとみなせよう。

おそらくは必ずおこるであろう反論に、あらかじめ答えておきたい。易は、パターンの記號化と記號間の關係づけとによって、パターン認識の問題にせまろうとした、人類のもっとも先驅的な試みである。周知のように、易においては、陽の記號一と陰の記號二とを六つ組合せ、六十四のパターンすなわち六十四卦をつくり、記號の位置によってそれぞれのパターンの特性を、また、記號の位置の變化をとおしてパターンのあいだの相互關係を、意味づけていく。それは二進法體系の最初の表現であり、現代の科學は、それに依據しつつ、パターン認識というきわめて困難な問題に切りこむ鍵を、ようやく掴んだばかりなのである。たしかに、爻辭とよばれるパターンの意味づけは、占いであった。だが、その意味づけが妥當かどうかという問題とパターンの記號化の試みとは、はつきり區別して考えなければならない。中國人の思考法のもっとも重要な特質は、パターンの認識にあった。しかも、朱子が氣象學にとりいれたのは、あくまで易の記號化されたパターンとその相互關係であり、經驗的事實の説明のモデルとして、それをつかったのである。だから、もし自然學として問われるとするならば、易がもともと占いの書であり、その解釋の體系によって中國の形而上學の基礎になった點にあるのでなく、そのパターンがモデルとして妥

當であつたかどうかという點にある。そのことまで非難できる人があるとすれば、モデルなしに思考をすすめることができる
と信じている人だけであろう。

「易の字義は陰陽にすぎぬ」⁽²⁴⁾と朱子はいう。そして、楊龜山のエピソードを語る。

龜山が黃亭の詹季魯（未詳）の家をとつた。季魯が易を問うた。龜山は一枚の紙をとり、圓をえがき、墨でその半ばを塗りつぶしていった、「これが易だよ」。この話はいへんいい。易とは一陰一陽が多くの圖がらをつくりだすものにすぎない。⁽²⁵⁾

陰陽の組合せがつくりだす圖がら、すなわちパターンは、事物の發生と消滅をあらわす。それは陽氣の消長といつていい。

だいたい發生すれば、すべては一つの陽氣であり、ただ消長があるというにすぎぬ。陽が一分のびれば、下のほうに陰が一分生まれるけれども、陰を求めてくるのでなくて、陽の消えるところが陰だということだから、陽が来るのを復⁽²⁶⁾というのである。

事物の發生が陽に結びつくのは、生物モデルであるかぎり、當然であろう。事物の消長、その普遍的な過程を記號化したのが、易の卦にほかならぬ。

まあ見てみるがいい。天地の間にほかになにがあるか、ただ陰と陽の二字にすぎぬ。どんなことがらであろうとすべて、それを離れえない。ただおのれの身で體得せよ。眼をあけたとたんに、陰でなければ陽だ。そこにひしめいていて、すべてべつ⁽²⁷⁾のことがらになりえない。仁でなければ義であり、剛でなければ柔である。この自分が前へ行こうとすればそれが陽であり、後へさがったとたんに陰を意味する。動いたとたんに陽であり、靜まったとたんに陰であつて、ほかの見かたをすべきでない。ただ一たび動き一たび靜まるのが、陰陽にすぎぬ。

伏羲はただそれにもとづいて、卦をえがいて人に示しただけである。かりに一陰一陽だけでは、やはりもろもろのパターンを包含できないので、そこで交錯させて六十四卦・三百八十四爻とした。初めは多くの卦・爻があつたにすぎないが、

のちに聖人がさらに多くの辭(意味づけ)をその下につけた。ほかの書であれば、もともとそのことがらがあつて、はじめてその道理を説いている。易はまだそのことがらがあるまゝに、假託してすべてがそのなかにあると説く。たとえば尙書なら堯・舜が生まれ、禹・湯・文・武・周公が生まれてきていろんなことをやり、そこでいろんなことを説く。ところが易は、もともとまだ聖人が出るまゝにあらはじめ説いていて、人が占う(意味づける)のを待つのだ。大事も小事も、一つとしてそれから外れるわけにはゆかぬ。⁽²⁷⁾

朱子は、具體的なことがらをとおして表現されたパターンと記號化されたパターンとのちがい、および、パターンの記號化とその意味づけとのちがいを、このようにはつきり自覺していた。その根據にたつて、記號化されたパターンを氣象學のモデルにつかうのである。一般的なパターンが、記號化をとおして、具體的・個別的な現象を説明するモデルとなる。この構造に、わたしたちは注目しなければならぬ。

朱子は、いう。

陽氣はただ六層であり、ひたすら上つてゆき、上りきつたあとの、下のほうの空っぽなところ、それが陰だ。⁽²⁸⁾

すなわち、氣象現象にかかわる空間は六つの層をなしており、おなじく六層の陽氣がそれを一層つつ上昇してゆく過程が氣候の年周變化、すなわち、季節の變化にほかならない。もっと詳しくいえば、

天地の間には、ただ六つの層がある。陽氣が地面のうえにくるとき、地下が冷えてしまう。ただこの六番めの陽が伸びて、あの第六番めに行ったとき、極點に達して行きどころがなくなり、上のほうはつきつぎに消えてゆくだけである。上のほうでいくらか消えてゆくと、下のほうでそれだけ生じてくる。それが陰だ。⁽²⁹⁾

この氣の運動は、つねに上に向う。だから、月令の「地氣上騰ス」にしたがつて、それは地の氣とよばれる。

天地の間には、ただ一つの氣があるだけだ。今年の冬至から來年の冬至までは、かの地の氣がめぐっている。それをば二段に分けると、前のほうのものが陽で、後のほうのものが陰だ。さらに四つに分けてもそうで、それが四時だ。⁽³⁰⁾

陽がどこからはじまるかについては、十二卦すなわち曆學の立場と四時の氣すなわち氣象學のそれとのあいだに、ややくいち

がいがあ。しかし、空間の六層のうち、二層が地下に、四層が地上にあるのを理解すれば、この對立は二次的なものとなる。

天	子	丑	寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥
地	復	臨	泰	大壯	夬	乾	姤	遯	否	觀	剝	坤
十二子卦	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
月節氣	大雪至	小大寒	立春春	雨水驚蟄	清穀明	立夏滿	芒種至	小大暑	立秋暑	白露分	寒露降	立冬雪

図2 易のパターンによるモデル

のであろう。圖を参照してその説を推察すればわかる。

寒暑は、このように、溫厚の氣すなわち陽氣と嚴凝の氣すなわち陰氣が、地上の四層にどう配列されるかによって決つてく

十二卦を論ずれば、陽は子にはじまって巳におわり、陰は午にはじまって、亥におわる。四時の氣を論ずれば、陽は寅にはじまって未におわり、陰は申にはじまって丑におわる。この二説はややくいちがつてゐるみたいだけれども、争點は二次的なものにすぎない。というのは、子の位は一陽が生まれるけれども、まだ地からでない。寅の位の泰卦になれば、三陽が生まれ、はじめて地上にでて、溫厚の氣がそこからはじまる。巳の位の乾卦は六陽が極點に達するけれども、溫厚の氣はまだおわっていないから、午の位に一陰が生まれるけれども、まだ陽をそこなわない。きつと未の位の遯卦になつてのちに、溫厚の氣ははじめてつぎるのである。その午の位は陰がすでに生まれるけれども、嚴凝の氣は申になつてやつとはじまる。亥の位は六陰が極點に達するけれども、嚴凝の氣は丑になつてはじめてつぎる。意味もそれにしたがっている。というのは、地下の氣はわかりにくくて、地上の氣は知りやすいから、周人が建子を正月としたのは天道になつてゐるけれども、孔子は國の治めかたを論じて、そこで夏の時(建寅)を正月としたのである(論語・衛靈公)。おそらく、その陰陽の始終がはつきりしているのをとつた

る。ちなみに、六層といえは、氣候はひと月ごとに段階のないし非連續的に變化してゆくようにみえるけれども、決してそうでない。ひと月は、日でいえは三十日、時間でいえは三百六十刻に分けられる。それに對應して、一陽の記號一も三十ないし三百六十の部分に分かれる。まさに時時刻刻、陽氣が發揚していつて、それが三百六十の部分を見たとしたとき、はじめて一陽として記號的に表示できる段階に達する。だから、その過程は連續的なのである。氣の連續性にもとづく當然の歸結にすぎぬ。ここに一つの問題がおこる。ひたすら上昇をつづける陽氣は、いったいどこからくるのか。その年の六層の陽氣とあくる年のそれとのあいだには、どんな關係があるのか。易・繫辭傳にいう、「夫レ乾ハ其ノ靜マルヤ專、其ノ動クヤ直、是ヲ以テ大イニ生ズ。夫レ坤ハ其ノ靜マルヤ翕、其ノ動クヤ闢、是ヲ以テ廣ク生ズ」と。朱子は周易本義において、こう注している。

乾ハ一ニシテ實、故ニ質ヲ以テ言イテ大ト曰ウ。坤ハ二ニシテ虛、故ニ量ヲ以テ言イテ廣ト曰ウ。蓋シ天ノ形ハ地ノ外ヲ包ムトイエドモ、其ノ氣ハ常ニ地ノ中ヲ行ル。易ノ廣大ナル所以ノ者ハ、此ヲ以テス。

このことばをめぐる長い問答の一部を、引用しよう。

(劉) 用之がいった。地の形は肺みたいなもの。形質は硬いけれども、中はもともと虚だから、陽氣がその中をなんのさまたげもなしに昇降し、「金石トイエドモ透過」(朱子のことば)してゆく。地がこの氣を受けて、萬物を發育するのです。

(先生は) いわれた。そのとおりだ。要するに、天の形は一つのふいごみたいなもの。天がそのふいごの外側の皮殻だ。内側には多くの氣をつつんでいて、開閉し消長する。だから、「乾ハ一ニシテ實」と説いたのだ。地はただ一つの物であつて、内側はすべてこの氣の昇降・來往なのである。内側が虚だから、この氣の昇降・來往をいれうる。それが地をつつみうるから、その質が大きいと説いた。それが天の氣をいれうるから、その量が廣いと説いた。地の形に限りがあるから「量ヲ以テ言ウ」と説いたのではない。ただ、地はすべて天の氣をいれうるから、その量が廣いと説いたにすぎない。⁽³⁸⁾

陽氣の上昇といつても、この立場にたてば、天地を上下としてとらえる觀點に固執してはならぬ。

さらに(徐元震が) たずねた。「雷ノ地ヲ出デテ奮ウハ豫」(易・豫卦・象傳)のち、六陽の半分が地下にあるとは、天

と地が均分されているということですか？

(先生は) いわれた。もし均分されているというなら、天のほう在地をつつんでいる。そのことは、必ずしも論じなくていい。⁽³⁴⁾

したがって、天の氣と地の氣を區別する絶對的な根據もない。さきの周易本義の注をめぐる問答は、つづけていう。

また(先生は) いわれた。考えてみれば、天地のあいだにはこの氣が昇降・上下しており、六層に分けるべきである。

十一月冬至に、下のほうの第一層から生まれてきて、まっすぐに第六層までゆき、極點まで上って天に達すれば、四月になるのだ。陽氣が生じきつてしまえば消え、下のほうに陰氣が生まれる。ただこの一氣にすぎず、たえまなく昇降・循環して、六層のなかを往來するのである。

(弟子が) たずねた。月令のなかの「天氣下降シ、地氣上騰ス」は、これはやはり天地にそれぞれ氣があつて、交合するみたいですが？

(先生は) いわれた。ただこの一氣にすぎぬ。陽が極點に達すれば陰が生まれ、陰が極點に達すれば陽が生まれるだけだ。「天氣下降ス」とは、ただ冬至の復卦のとき、陽氣が下のほうに生まれるから、「天氣下降ス」というのだ。

あるひとがいった。それによれば、陰が上に消えて、陽が下に生まれるということであつて、「天氣下降ス」とは思えません。

(先生は) いわれた。やはり天の運行が一轉すれば、陽氣が下にあるから、下から生じてくるはずである。いま天の運行でいえば、一日にひとめぐり自轉(日周回轉)する。しかしながら、あの大轉(年周回轉)する時期もある。心を大きくして見て、はじめて理解できる。一點に拘泥すればわからぬ。天はもとと大きい物なのだから、偏った立場で考えてはいけな⁽³⁵⁾い。

地の氣とは虚ろな地の中を透過する天の氣にほかならず、ひたすらなる陽氣の上昇は、天の年周回轉と結びつくことによって、

循環運動となる。ここにわたしたちは、宇宙論・天文学から氣象學までをつらぬく、朱子の論理の一貫性と體系的構想の雄大さとを、まぎれもなく確認できるであろう。ついでながら、朱子はこの大轉、つまり、年周回轉が一樣であるとは考えていない。

わたしの考えでは、春夏の間は天の回轉がしだいにおそくなるから、氣候はのどかでぼーっとしていて、南方はそれごとくにひどい。秋冬はというと天の回轉がますますはやくなるから、氣候はすがすがしくて宇宙はすみわたっている。「天高く氣清シ」といわれるのは、その回轉が速くて氣がぴんとはりつめてい(36)るからである。かくて、天すなわち氣の回轉は、二重の意味で、氣候の年周變化を規定するのである。

二 氣象現象の成因

1 土地と氣候

氣候は土地によってことなる。朱子によれば、それは地形と日照の度合いとによってきまる。一般に、「西北の地はきわめて高い」⁽³⁷⁾。干闥から來貢した使者の言にしたがうなら、「中國は崑崙山の東南にあって、天竺諸國はその眞南にある」⁽³⁸⁾が、だいたい地の形は饅頭みたいなもの。その撚り先の尖ったところが崑崙である⁽³⁹⁾。

西北部が高く盛りあがった饅頭型の大地を、想像してみよう。東南部の廣漠とひらけたところに中國がある。天はこの大地のすぐ近くに迫っていて、大地からほど遠からぬ、南に傾斜した軌道を、太陽がまわっている。とすれば、極東の地では午前中が短く、午後が長く、極西の地では午前中が長く、午後が短く⁽⁴⁰⁾、北方では晝が長く、夜が短いはずである⁽⁴¹⁾。中國の各地方における氣候のちがいは、この地形とその日照との關係から理解できる。

周禮・地官・大司徒に、「日東則景夕、多風。日西則景朝、多陰。」ということばがみえる。大司徒の職掌の一つにノームンによる測定があり、「景」とはノームンの影をさす。この難解なことばの解釋をめぐって古來さまざまな説があり、極東の地では午前中が短く、云々というのも、實は景夕・景朝にたいする朱子の解釋なのであつた。つづく多風・多陰について、朱子語類は、つぎの問答を記録する。

(弟子が) たずねた。多風多陰の説は？

(先生は) いわれた。いま近東の地はちゃんと風が多い。たとえば海ぞいの諸郡は風がきわめて多く、いつもきまつた時に吹いてくる。春なら必ず東風、夏は必ず南風で、このあたりのようにきまりがないのではない。それは、土地がひろびろとひらけ、高い山でさえぎられないから、風がそれぞれきまつた方向から吹くのである。わたしはむかし漳・泉でそれをたしかめた。朝にはもう風が生じ、午になれば盛んに吹き、午後には風力がしだいに衰え、晚になればもうちらともそよがず、かつてくるつたことがない。それは、風が陽氣にしたがつて生じるからだ。日が上つたとたんに陽氣が生まれ、午になれば陽氣が盛んになり、午後には陽氣が衰えるから、風もそれにしたがって盛衰する。たとえば西北のあたりが多陰というのは、たんに山が高くそれをさえぎっているからでなく、ちゃんと陽氣がそこに達して衰えるのである。それは、日がそこに達してちょうど午ならば、そこはもうずいぶんおそくて、まもなく日が落ちるから、西のほうはあまり日を見ない。古語に「蜀ノ日、越ノ雪」というのは、日が少いのを言ったのだ。だから、蜀には漏天がある。古語に「巫峽漏天多シ」といい、杜甫が「角ヲ鼓ス漏天ノ東」というのは、その地によく雨がふり、天が漏れるみたいなのを言ったのだ。しかし、これでゆくと、天地もあまり廣くない。日月の照らすところ、および、寒暑・風陰によつて觀察すれば、たしかめることができる。

漳州・泉州地方でのかれの經驗的な觀察はたしかであり、それにあたえた説明も適確である。ここでも陽氣が上昇するとみなせば、風の成因としての上昇氣流を、みごとにとらえていたことになる。もっとも、かれがそこまで考えていた證據はない。

朱子は蜀までおもむいたことはないけれども、経験をとおして推測しようとする態度は、つぎのことばにうかがえる。ある日學生たちが訪ねてゆくと、話が寒さのことになった。朱子がいかに、西川(四川省西部)のひとは寒さがにがてである。

たとえばあの雪のふるところは、四、五月になっても雪がとけない。それがいわゆる景朝多風(陰のあやまり)のところだ。つまり、日がそこに達すると、午どきをすぎても、陽氣があまり厚くないから、そうなのだ。いわゆる漏天のところはみなそこにある。そうであれば、天もあまり廣くないということだ。そこでさえそうであつて、これは西南がなおそうだということなのだ。西北なら、寒さはあの秦・鳳あたりよりひどいと思われる。寒さは峨眉山みたいなものと思われる。趙子直(趙汝愚)がかつて山上に登り、粥をたいたがちつとも煮えず、芯ができた。そのとき李某という者がいて、ここえてひどく苦しんだ。⁽⁴⁸⁾

ともあれ、こうした日常経験を一つひとつ理論のなかにくみいれていくところに、朱子の自然學が體系として成立してくる。しかし、そこにはまた、その陥穽もひそんでいるのである。

2 いくつかの現象

a 先人の説

陰陽概念によつて氣象現象を説明しようとする試みは、たとえば、すでに莊子などにも散見する。しかし、それがかたちをととのえたのは、前漢末から後漢にかけてである。大戴禮記・曾子天圓の説がかなりよくまとまっている。

陰陽ノ氣ハ、各々其ノ所ニ靜マレバ則チ靜ナリ。偏レバ則チ風、俱ニスレバ則チ蠱、交レバ則チ雷、亂レバ則チ霧、和スレバ則チ雨。陽氣勝レバ則チ散リテ雨露ト爲リ、陽氣勝レバ則チ凝リテ霜雪ト爲ル。陽ノ專氣ハ電ト爲リ、陰ノ專氣ハ霰ト爲ル。電トハ一氣ノ化スルナリ。

またその注にいう。

陽氣雨ニ在リ、溫煖ナルコト湯ノ如シ。陰氣之ニ薄ルモ相入ラズ、轉ジテ電ト爲ル。陰氣雨ニ在リ、凝滯シテ雪ト爲ル。陽氣之ニ薄ルモ相入ラズ、散リテ霰ト爲ル。

まずこれを、説明の典型とみなしていい。あとは大同小異である。たとえば、緯書の春秋元命苞なら、陰陽の「聚」ったのが雲⁽⁴⁴⁾、「怒」ったのが風⁽⁴⁵⁾、「亂」れたのが霧⁽⁴⁶⁾、「和」したのが雨⁽⁴⁷⁾、「凝」ったのが霜と雪⁽⁴⁸⁾、「散」ったのが露⁽⁴⁹⁾、「合」したのが雷⁽⁵⁰⁾、「交」ったのが虹⁽⁵¹⁾、といったぐあいだ。特筆すべきは、韓詩外傳に、

凡ソ草木ノ花ハ多ク五出シ、雪花獨リ六出ス⁽⁵²⁾。

と、雪の結晶の觀察が書きとどめられていることであろう。ヨーロッパでそれが知られるのは、近代になってからである。

陰陽による説明は、しかし、交・亂・和・凝といった概念がいかなる過程をさすか、また、その前提として、陰陽とはいかなる概念なのか、そこが明確にされなければ、具體的な現象の説明として、あまり意味をもたない。その點で大きく一步をすすめたのは、やはり張横渠の正蒙・參兩篇の説であつた。「陰ノ性ハ凝聚、陽ノ性ハ發散。陰ハ之ヲ聚メ、陽ハ必ズ之ヲ散ラス。其ノ勢ハ均シク散ラス。」と、その作用の原理をあたえたのちに、いう。

陽、陰ニ累セラルレバ、則チ相持シテ雨ト爲リテ降り、陰、陽ニ得ラルレバ、則チ飄揚シテ雲ト爲リテ升ル。故ニ雲物ノ太虚ニ班布スル者ハ、陰、風ニ驅ワレ、斂聚シテ未ダ散ラザル者ナリ。凡ソ陰氣凝聚シ、陽、内ニ在ル者ハ出ズルヲ得ザレバ、則チ奮撃シテ雷霆ト爲リ、陽、外ニ在ル者ハ入ルヲ得ザレバ、則チ周旋舍マズシテ風ト爲ル。其ノ聚ルニ遠近、虚實有リ、故ニ雷風ニ小大、暴緩有リ。和シテ散ズレバ、則チ霜雪雨露ト爲リ、和セズシテ散ズレバ、則チ戾氣・疇霾ト爲ル。陰常ニ散緩トシテ、交ワリヲ陽ニ受クレバ、則チ風雨調イ、寒暑正シ。

朱子は、この説から大きな影響をうけ、「横渠の正蒙が風雷雲雨の説を論じており、いちばんわかりやすい⁽⁵³⁾、と評價する。とはいへ、横渠はまだ、霜雪・雨露などに「和」の概念を適用し、あるいは、陰陽が「交」わるといった表現を使用している。その點で、漢代以來の傳統に安易にもたれかかっているとところがある、といえよう。それをのり超える可能性は、經驗的な觀

察とそれにもとづく思索をふかめることによつてのみ、開かれる。すなわち、朱子の課題であつた。

b 雨

横渠の説を、朱子はどう解釋する。

横渠はいう、「陰、陽ニ累セラルレバ、則チ相持シテ雨ト爲リテ降ル」と。陽氣が昇つていったとき、いきなり陰氣にぶつかれば、いっしょにおりてきて雨となる。というのは、陽氣は軽く、陰氣は重いから、陽氣が陰氣に壓されて墜ちてくるのである。⁽⁵⁴⁾

べつに、つぎのようにもいう。

およそ雨というのはみな、陰氣が盛んで、ぴしつと凝結して、そこで濕潤になり、下降して雨となるのである。たとえば、せいろはびったり蓋をすると、氣がこもつて外にでず、まわりにはじめて溫かいしずくができる。⁽⁵⁵⁾

この二つの説明は、いずれも一一九八年ないし九九年、つまり朱子が死ぬ一、二年まえのものである。かれの自然學説は、そのころピークに達する。だから、定論とみてよい。兩者は一見、矛盾するようだが、そうではあるまい。後者は下降する陰氣に、前者は上昇する陽氣に、それぞれ重點をおいて表現したものであらう。せいろの比喩が、それを示唆する。

c 雲

おなじく横渠の説をひいて、いう。

「陰、陽ニ得ラルレバ、則チ飄揚シテ雲ト爲リテ昇ル」。陰氣が昇つていったとき、いきなり陽氣にぶつかれば、その飛騰をたすけて、上つて雲となる。⁽⁵⁶⁾

雲について直接に語ったことは、これだけしかない。しかし、易・小畜卦の彖傳にみえる「密雲雨フラズトハ、往クヲ尙ブナリ」ということばをとらえて、

陰がそれを(陽氣)包みこめず、陽氣はいっそう散じて、雨になれない、ということである。だから「往クヲ尙ブナリ」。⁽⁵⁷⁾

と解説する。陰氣が上にあつて、そこへ陽氣が昇ってくるのであれば、包みこむかたちになるが、雲のぼあいには、その位置が逆になっているのである。

d 雷

横渠の説にたいする説明は、こうである。

「陰氣凝聚シ、陽、内ニ在ル者ハ、出ズルヲ得ザレバ、則チ奮撃シテ雷霆ト爲ル」。陽氣が陰氣の内部にひそんで出れないから、爆發して雷となるのである。⁽⁵⁸⁾

朱子によく雷を爆竹にたとえる。

雷はいまの爆竹みたいなもの。鬱積の極點に達して飛び散るものだからである。⁽⁵⁹⁾

程子の説とも、それは矛盾しない。⁽⁶⁰⁾

(弟子が) たずねた。雷電は程子が「ただ氣が摩擦するのだ」といっていますが、そうでしょうか。

(先生は) いわれた。そうだ。⁽⁶¹⁾

「聲トハ、氣、形ト相軋リテ成ル。雨氣風雷ノ類、兩形桴鼓ノ類ハ、氣、形ニ軋リ、笙簞ノ類ハ、形、氣ニ軋ル⁽⁶²⁾」とは朱子の音聲論だが、雷のぼあいには、陽が氣、陰が形と考えられる。雷はしばしば雨をとまなう。易・解卦・彖傳にいう、「天地解ケテ、雷雨作ル」と。朱子によれば、天地とは氣すなわち陰陽である。

陰陽の氣がむすぶれて極點に達し、いきなり飛び散って、この雷雨となる。⁽⁶³⁾

雨もまた、陰氣が陽氣を包んだものであった。その極點に達したのが雷にほかならぬ。雷と雨がともなうのは、けだし當然だろう。ちなみに、雷はかみなりの落ちてくるもの、霆は雷鳴、電は稲妻をさす。

e 風

朱子によれば、横渠のことばはつぎのことを意味する。

「陽、外ニ在ル者ハ、入ルヲ得ザレバ、則チ周旋舍マズシテ風ト爲ル」。陰氣が内部に凝結し、陽氣が入ろうとしても入れないから、たえずその外をまわって風となる。陰氣を吹きちらしてしまえば、はじめて止む⁽⁶⁴⁾。

風とは氣の回轉運動であるとなす點において、この説は鋭い。そのイメージは、天の氣の回轉運動に結びついている。

風は天に似ていて、たえずまわっている。いまここに風がないのは、あるいはあちらでまわっているか、あるいは上のほうでまわっているかも、知れないということだ。夏は南風が多く、冬は北風が多いが、それもわかる⁽⁶⁵⁾。

上空にはたえずつよい風が吹いているという道家の萬里剛風説も、それにかかわる。朱子の説は、ここでも一貫してやまぬ。

f 霜・露・霧

横渠の説にふれて、いう。

「和シテ散ズルバ、則チ霜雪雨露ト爲リ、和セズシテ散ズレバ、則チ戾氣・噎霾ト爲ル」。戾氣とは飛雹の類、噎霾とは黃霧の類。みな陰陽の邪惡・不正の氣である。だから、雹の水はよごれていたたり、青黒い色だったりする⁽⁶⁶⁾。

もっと詳しい説明は、つぎの問答にあたえられている。

(弟子が) たずねた。伊川は「露は金の氣だ」といっていますが？

(先生は) いわれた。露にはちゃんと清肅なる「氣象」があるということだ。古語に「露結ビテ霜ト爲ル」という。いま觀察すれば、まさにそのとおりだ。伊川はそうでないといっているのは、どうしてかな。たぶん、露は霜の氣とちがいで、露は物を養えるが、霜は物を殺せるからだろう。さらに雪と霜にもちがいはある。霜なら物を殺すが、雪は物を殺せない。雨は露ともちがう。雨氣は昏く、露氣は清んでいる。氣が蒸れて雨となるのは、せいろに蓋をすれば、その氣が蒸れて、たらたらとしくが落ちるみたいなもの。氣が蒸れて霧となるのは、せいろに蓋をしなければ、その氣が散って聚まらないみたいなもの。霧は露ともすこしちがいはある。露氣は肅^{すがすが}しくて、霧氣は昏い⁽⁶⁷⁾。

たとえば露と霜は、成因に關連性があっても、その氣の働きはことなる。そのばあい、働きはここではっきりと、「造化」

すなわち「物を生む」觀點からとらえられている。なお、清・昏は感覺的性質であつて、その意味では、輕重・剛柔などおなじだけれども、感覺がよびおこす感情をややふくんだ表現であらう。肅ないし清肅になれば、いっそうはつきりする。當然、それは價值的觀點をふくむ。しかし、存在がそれ自體で價值をもつとみなす立場をとり、體用の論理を適用すれば、感覺的性質といわば「感情的」性質とのあいだは連續的であり、後者も對象そのもののもつ「氣象」である、と把握されるはずである。主題にかえるなら、

霜は露が凝結しただけであり、雪は雨が凝結しただけである。古人は「露は星月の氣である」と説くが、そうではない。いま高い山の頂上には、晴れの日でも露がない。露は下から上へ蒸れてゆくだけである。ひとの話では、極西の高い山のうえには、雨雪もないそうだ。⁽⁸⁶⁾

高い山には、どうして霜露がないのか。

高い山には霜露がなくて、雪がある。わたしはかつて雲谷に登り、朝起きて灌木のなかを通りぬけたが、露がちつとも衣服をぬらさない。煙霞が下にはてしなく廣がつてまるで大海原だし、山山はちよつと峰のいただきをのぞかせ、煙雲がそれをとりまいて往來し、山が動いてゆくみたいで、天下の奇觀だった。

あるひとがたずねた。高い山に霜露がないのは、どんなわけでしょう？

(先生は) いわれた。上のほうは氣がすこしづつ清んで、風がしだいにつよくなる。すこしばかり霧氣があつても、みな吹き散らしてしまうから、霜露ができない。もし雪なら、ただ雨が寒にあつて凝つたのだから、高くて寒いところはまづ雪ができる。高いところには萬里の剛風があるという説が道家にあるのは、そこでは氣が清んでぴんとはりつめている、ということだ。低いところなら氣が濁っているから、ゆつたりしている。⁽⁸⁷⁾

霧については、なおつぎのようにもいう。

天の氣が降つても、地の氣に接しなければ霧となり、地の氣が昇つても、天の氣にふれなければ霧となる。⁽⁸⁸⁾

天の氣が降るを陽氣が昇る、地の氣を陰氣と讀みかえれば、意味するところは明らかだろう。

g 電・雪

その緻密な觀察によつて光っているのは、電である。まず、引用しよう。

さて、電の兩端は尖つていて、稜線がある。おそらく、はじめのあいだは圓だが、上のほうで陰陽が争い、こんなふうになり砕いたのであろう。電の字が雨と包から構成されているのは、この氣が包みこんでいるということ、だから電としたのだ。⁽⁷¹⁾

電は球形というよりもむしろ圓錐形で、頂點から何本か稜線が放射狀に走っている。そう指摘したのは、レイノルズ(Reynolds, 1876)であつた。⁽⁷²⁾すでに七百年まえ、朱子がそれに氣づき、成因を考えていたわけだ。

電の觀察とならんで注目すべきは、雪の結晶にかんする獨創的な見解であらう。

雪の花が必ず六瓣になるゆえんは、おそらく、霰がおちるとき強い風に打ち開かれるから、六瓣をつくるだけだ。たとえば、ひとがどろどろの泥團子を地面に投げると、泥は必ずまわりへ走つて稜線をつくる。六は陰の數でもあり、太陰玄精石も六稜である。おそらく天地自然の數であらう。⁽⁷³⁾

比喩はしばしば、未知の現象にきりこんでゆくための思考のモデルとして働く。觀察できるし、實驗もやれる泥團子の現象をモデルにしたこの説は、雪の結晶の成因を説明しようとする最初の試みであつた。電と雪の科學は、實に朱子からはじまつたのである。思辨哲學者としてのみ知られているから、あえて強調しておくなら、かれは自然現象のすばらしい觀察者だったので。なお、雪の造化に參與する働きを、かれはこうみる。十月の雷鳴はおそらく陽氣を發動する。⁽⁷⁴⁾

大雪が豐年の兆となるというのは、雪が年を豊かにするのではない。陽氣が地に凝結して、あくる年に發達し、萬物を生長させるからであらう。⁽⁷⁵⁾

h 虹

虹の光學的な説明も、忘れてはなるまい。虹には雨をふりやませる力がある、という俗説があったらしい。それを否定しつつ、虹と雨がやむ現象との關係を、つぎのようにいう。

しかし、雨氣が薄くなってくれば、また日の光が雨氣を射散らしてしまうということだ。⁽⁷⁶⁾

虹そのものについては、

たとえば虹は、もともときり雨^{さめ}が日に照らされて影像をなしたものにすぎぬ。⁽⁷⁷⁾

とみる。おそらく、反射現象を考えていたのであろう。

三 合理主義の陷穽

ひと組みの概念と論理によってあらゆる現象を説明しつくし、おのれの理論のなかにあらゆる対象を包括しつくさんとした朱子は、ことばのほんらいの意味で、透徹した合理主義者であった。中國における合理主義の精神の發現は、朱子の氣の理論においてきわまる。日常的な經驗も、觀察された事實も、旅行者の報告も、あるいは、先人の學說も俗間の信仰も、どれひとつとして、かれの關心の対象でないものはなく、かれの理論のなかに位置をしめないものはない。いまや天地萬物、森羅萬象が、目にみえない氣の世界からたち現われ、そのなかにすがたを消してゆく。それを限るもの、それを障るものは、なにもない。だが、まさにそれゆえに、あまりにも透徹した合理主義者であったがゆえに、わたしたちにはかれが「非合理的」にみえてくるのだ。

氣象學の分野にかぎれば、といっても、そのなかには人間學の核心にかかわる問題がふくまれているのだが、その五つの例を提出することができる。

(1) 候氣の説 後漢書に候氣の法とよばれるものがみえる。木机のうえに土をひらく盛り、それに十二の律管を埋め、管の

上端を水平にならし、その中に灰を満たして、密室に置く。律管とは樂器の一種であつて、管の長さによつて音程がきまる。氣が地中から昇つてきてある管の下端に達すると、管のなかの灰が吹飛んでしまふ。氣がどの深さまで達するかは季節ごとによりまゐっているから、それをつかつて季節の到來を測候できる、というのである。朱子は、いう。

いま曆學者は律呂をつかつて氣を候う。その法はもつとも精密である。氣の到來が寸分もくるわないのは、この氣がすべて地中から上へとおりにぬけてくるからだ。たとえば十一月冬至なら、黃鐘管は地面から九寸あるが（黃鐘の長さは九寸である）、葦の灰をその中に滿すと、至（冬至）の日に氣が達して灰がなくなる。ノーマンの時間とくいちがわぬ。⁽⁷⁸⁾

このことばは、直接には、沈括の說⁽⁷⁹⁾によつたのであろう。自然學にかんしては、朱子は沈括の見解を數多くとり入れた。これもその一つである。沈括のような第一級の自然學者が信じていた、というだけではない。朱子の理論によつてみごとに説明されるのみならず、もし事實であるならば、その理論の妥當性を檢證する有力な事實となる底の現象なのである。すくなくとも朱子は、そう考えていたにちがいない。

(2) 龍行雨の說 龍は雲物であり、雨をふらせる、という考えが古くからあつた。たとえば、易・乾卦・文言に「雲ハ龍ニ從イ、風ハ虎ニ從ウ」とみえる。こんな問答がある。

（弟子が）たずねた。龍が雨をふらせるといふ説は？

（先生は）いわれた。龍は水性の物である。それが出てきて陽氣といつしよに蒸れるから、雨をふらせることができる。ただし、ふつうの雨は、ちゃんと陰陽の氣がむんむん蒸れてできる。必ずしも龍のせいではない。⁽⁸⁰⁾

わたしたちの眼には、「ふつうの雨」の說が「龍行雨」の說にぶつかつて腰くだけになつてゐる、朱子が俗信に、特殊なケースとの限定つきで、妥協しているようにうつる。しかし、水は陰氣なのだから、かれの理論の枠組みにちゃんとおさまつてしまつてゐる。いいかえれば、「合理的」に説明できるのである。もし龍が實在するならば、これもかれの說の傍證となるだろう。つけくわえておけば、龍の實在性への信念は、龍卷現象などにささえられていたようにみえる。

先生がたずねられた。四明に龍が現れたというが？

(藤) 璘が答えていった。近年、鄞縣の趙公萬がなか庭の龍井で雨乞いをしましたが、龍が現れたことがあったそうです。張左藏良臣はその記にこう書いています。(下略)

(先生は) いわれた。王嘉叟がいうのには、龍が水からではじめるときには、まず蓮の花みたいなのがあって、それから水が湧きだし、異様な物がでてくる。二つの眼光は銅盤みたいなのが、趙縣尉がみたのとかかなり一致するな。⁽⁸¹⁾

略した部分は、ちょうど繪にかかれてあるそのままの記述、まさに繪そらごとだが、朱子の引いているほうは、眼の話のぞけば、龍卷の記述とみなせよう。ちなみに、程子も龍を信じており、「龍はきつと胎生にちがいない」と考えていた。⁽⁸²⁾

(3) 蜥蜴吐雹の説 蜥蜴が雹を吐くという俗信についても、朱子はおなじ態度をしめす。

世間の人がいうには「雹は蜥蜴がつくるのだ」と、伊川は説く。はじめはそんなわけはあるまいと思つたが、考えてみるとやはりある。ただ、みんながみんな蜥蜴がつくるものだというならば、それはいけない。ちゃんと上のほうで結んでできるものもあるし、蜥蜴のものもある。⁽⁸³⁾

程子のことばというのは、こうである。

正叔(伊川)がいった、蜥蜴は水を含み、雨がふればふるいたつ。子厚(横渠)がいった。必ずしもそうではない。雹にはずいぶん大きいがある。みんなが蜥蜴のせいではあるまい。いま蜥蜴をつかつて雨乞いをして、骨折りぞんだ。そいつがどうして雨をふらせられよう。正叔がいった。伯淳(明道)が南方で官にあったとき、長官が茅山へ龍に請いにゆかせようとした。かれは辭退してこう言った。鬼神に祈請するばあい、信仰している者なら、應があるはずですが、あらかじめ信仰していなければ、すじがとおりません、と。茅山の巖につくと、勅使のひとが水中で龍を二匹つかまえて、もちかえつたが、べつに異状はなかった。とうとう子供がおもちゃにして、殺してしまった。これは魚蝦の類である。ただ形がすこしちがつていて、龍のかっこうみたいなのにすぎぬ。この蟲は廣南にもいる。その形はおなじだが、ひとに喰いついて

害をもたらす。茅山のみたいに害をおよぼさないとちがう。⁽⁸⁴⁾

この會話は、宋の知識人たちの思考や行動の特徴をとらえて、あますところがない。この特徴は、ほとんどそのまま、朱子のでもある。ただ、それをどこまでも氣の立場で説明しようとしたのである。さきのことばにつづけて、朱子は蜥蜴が電を吐くのをみた人のはなしを、二、三語っている。一つだけ引いておこう。

ここの王三哥の祖父の參議をしていたのがいうには、かつて五臺山に登ったが、山はとても高くて寒く、眞夏に綿入れのかけぶとんをもつていった。⁽⁸⁵⁾夜中ごろひどく寒く、綿入れのかけぶとんを數枚重ねてもまだあつたまらない。山頂ではみんな蜥蜴が水を含んで吐きだすと電になる。しばらくすると風雨がはげしくなつて、吐いた電はみんななくなつた。あくる日下山するとそこにある。昨夜は大電になつたという話だ。たずねてみると、⁽⁸⁶⁾（昨夜とまつた）寺でみたのとそっくりだつた、と。

そして、こう説明する。

蜥蜴の形も龍みたいで陰の屬であり、この氣が感應してその働きをするのだ。こんなのがまさに陰陽の争うときであつて、だから電がふるときはきつと寒い。⁽⁸⁷⁾

電の形を觀察したことばは、實はこのすぐあとにつづくのである。もっとも、そう言つてゐるからといって、どこまで信じていたか、疑わしい。別の條では、やはり蜥蜴が電をふらせる話にふれて、いう。

この道理は、やはりどんな造化かしら。もしこの物（蜥蜴）をつかつて電をつくるとすれば、造化もつまらぬものだ。⁽⁸⁷⁾かりに信じているとしても、こんなことばをはかせる程度のことなのだ。とはいえ、わたしが強調したいのは、どこまで信じていたかよりもむしろ、それを氣の理論で説明できる點にある。

(4) 虹霓吸水と雷斧の説 虹が水を飲む話は、たとえば漢書などにもみえる。その起源はふるい。

薛士龍の家に鬼が現れたのを論じたついでに、（先生は）いわれた。世間の鬼神を信じるものは、みな天地の間に實在す

るといい、信じないものは斷固として鬼はいないという。けれども、ほんとに見たものもある。鄭景望はそこで薛氏がみたのを實(虚に對する。目にみえる、あるいは、感覺をとおして知覺できる事物ないしその道理、につかう概念の道理としたが、これはたんに虹霓の類なのを知らないだけだ。

わたし(吳必大)がそこでたずねた。虹霓は氣にすぎないのでしょうか、それとも形質をもっているのでしょうか？

(先生は)いわれた。水を飲むことができるからには、やはりきつと腸や肚がある。ただ、散じたとたんになくなってしまう。雷部の神物みたいなのも、この類だ。⁽⁸⁸⁾

この論理を、朱子はつぎのように説く。

雷は氣にすぎないけれども、およそ氣があればそこに形がある。蝦蟇さまみたいなのは、もともときり雨さめが日に照らされて影像をなしたものにすぎないけれども、やはり形があつて、水を飲んだり酒を飲んだりできる。⁽⁸⁹⁾

やはり、筋はとおっている。問題は、虹が水を飲む事實の有無にのみ、かわる。

「雷部の神物」とは、いわゆる雷斧の類をさす。

蔡季通がいうには、ひとが雷に撃たれたところでは、雷斧の類が手にいる。一氣が撃つてはじめてできるのであつて、それで物を打つのではない。ひとが拾った石斧をみると、いまの斧の格好で細黃石に似てる。⁽⁹⁰⁾

雷斧とは、要するに、石斧みたいなものであつたらしい。虹とちがつて、どうしてあとに残るのか。

あるひとがいうには、神物がある、と。

(先生は)いわれた。氣が聚まればあるはずだ。しかしながら、過ぎたとたんに散る。雷斧の類みたいなのも、氣が聚まってきたものだが、ただ、滓があるから散りえない。⁽⁹¹⁾

朱子が「非合理的」にみえてくる、とわたしは書いたが、それはこうしたことばに接したときである。

朱子はこの語ったことがある。

(弟子が) たずねた。世俗のいわゆる物怪神姦の説は、どう判断されますか？

(先生は) いわれた。世俗のは、だいたい八分どおりでたらめだが、二分はやはりその道理がある。⁽⁹²⁾

まず、本音であろう。要するに、否定しきれなかった、二分どおりは信じていた、ということだ。かれがなぜ二分どおり信じたか、を問題にするつもりは、わたしにない。それは當時の宗教觀念や宗教制度から、朱子の氣質や家庭環境や體驗にまでわたる問題であろう。わたしの關心は、かれがなぜ理論的にすっかり否定しきれなかったか、にある。

問題をこう限定すれば、それをとく鍵は、さきに引用したいくつかの朱子のことばに、すでにある。そこには、はじめはそんな道理があるかと思つたが、考えてみると、やはりあるとか、あるはずだとか、そんな表現が散見する。理論的にその存在の承認をせまられた、といつてしまえば強すぎよう。あたまで否定するひとなら、やはりそれなりの論據で否定しきるだろう。たとえば程氏は、鬼を見る話にかぎつていえば、それを「目病」ないし「心病」と、一言でかたづけた。⁽⁹³⁾ 朱子からは、ついにそのことばを聞けない。あらかじめ朱子に、たとえ二分どおりであろうと、信じる氣持があつた、あるいはすくなくとも、あるかもしれないぞという疑念があつた、とみななければならぬ。そして、その疑念にたつて存在の可能性を理論的に検討してみると、あるはずだという結論になる。そういうし組みに、朱子の氣の理論は、なつていた。

眼にみえない連續的な流體である、物質⇌エネルギーとしての氣は、それ自體すでに無限定な概念であつた。それは存在のいかなる様態をも、規定することをゆるす。しかも、氣は價值としての理⇌パターンをつねにそのうえに「塔乗」させている存在であり、價值概念をおのれのうちに擔う存在概念であつた。⁽⁹⁴⁾ だから、價值の出現するところ、氣もまた必ず出現する。のみならず、氣の作用の原理、氣象學でいえば主として感應だが、それもまた、きわめて無限定的な論理であつた。それは存在のいかなる様態にも働きうる原理なのである。かくて、存在と價值の領域にわたるあらゆる現象が、氣の理論、その概念と論理の枠組み、というとなにか硬い構造を想わせるなら、大風呂敷といいかえてもよい、そのなかにすっぽり包みこまれ、それによつて説明可能となるのである。そこに、朱子の透徹した、透徹しすぎて開けつびろげになつた合理主義が、成立する。わ

たしたちには、それが逆に「非合理的」にみえてくる。

近代の科學的な合理主義は、不徹底な合理主義である。不徹底であるがゆえに、それは「非合理的」なものを包みこむことができず、對極にすぎない非合理主義を成長させてゆくのだ。近代の科學的な合理主義は、二重の意味で、斷念した合理主義である。まずそれは、價值の問題を斷念する。價值は存在するものでなく、あらかじめ選擇してしまったもの、となる。いしかえれば、前提するものであつても、探究するものではなくなる。さらに、近代の科學的な合理主義は、森羅萬象の説明を斷念する。つまり、おいそれとは理論に還元できない事實の存在を承認する。事實は、理性によつては簡單に把握しきれないなものか、ただねばり強い格闘をとおしてのみ、すこしずつ理論のなかに組み入れてゆけるなものか、となる。それはあくまで事實に第一次的な價值をおく。いまや理論は、たった一つの矛盾する事實によつて、あつさり否定される底の代物なのである。つまり、一種の非合理主義といつていい。ただ硬い限定された枠組みのなかに閉じこもることによつてのみ、それは合理主義なのだ。

天地萬物、森羅萬象を理論的に説明できるとする確信にささえられている朱子の合理主義は、その限定された意味においては、逆説的にきこえるかも知れないが、事實よりも理論ないし理性に價值をおく。しかも、理論は無限定に開かれたし組みをもつ。かれの合理主義そのもののもつ陥穽が、「龍雨行」といった「非合理的」な現象の存在可能性を、承認させるのである。朱子がなぜ信じたかを問わぬ、とわたしはことわつたが、一言だけつけくわえておく。ひとつには、祖先崇拜という儒教の中心的な禮、ひとつには、官僚の一職務たる禱雨の行事が、それにかかわっているということだ。いずれも鬼神の存在と感應の原理を前提する。朱子によれば、鬼神も氣にすぎぬ。かくて、かれの氣の理論のうちに包括される。とはいへ、そこでかれの氣の自然學と理の人間學の解きたい懂着が、一舉に顯在化するのである。⁽⁹⁵⁾

注

(1) 太平御覽・卷十四引

(2) 朱文公文集・卷七十六・傳伯拱字序

(3) 無一物不有陰陽。乾坤至於至微至細、草木禽獸、亦有牡牝陰陽。

(語類·卷六十五。劉砥錄)

(4) 陰陽只是一氣。陽之退，便是陰之生，不是陽退了，又別有箇陰生。

(語類·卷六十五。陳淳錄)

(5) 陰陽做一箇看亦得，做兩箇看亦得。做兩箇看，是分陰分陽，兩儀立焉。做一箇看，只是一箇消長。

(語類·卷六十五。陳文蔚錄)

(6) 大抵陰陽只是一氣。陰氣流行即爲陽，陽氣凝聚即爲陰。非直有二物相對也。

(朱文公文集·卷五十。答楊元範書)

(7) 都是陰陽，無物不是陰陽。

(語類·卷六十五。陳淳錄)

(8) 一物上又自各有陰陽。如人之男女陰陽也。逐人身上又各有這血氣、血陰而氣陽也。如晝夜之間，晝陽而夜陰也，而晝陽自午後又屬陰、夜陰自子後又是陽，便是陰陽各生陰陽之象。

(語類·卷六十五。林學履錄)

(9) 天地統是一箇大陰陽。一年又有一年之陰陽，一月又有一月之陰陽。一日一時皆然。

(語類·卷一。程端蒙錄)

(10) 天地間道理，有局定底，有流行底。

(語類·卷六十五。晏淵錄)

(11) 陰陽有箇流行底，有箇定位底。一動一靜，互爲其根，便是流行底，寒暑往來是也。分陰分陽，兩儀立焉，便是定位底，天地上下四方是也。易有兩義。一是變易，便是流行底。一是交易，便是對待底。魂魄，以二氣言，陽是魂，陰是魄，以一氣言，則伸爲魂，屈爲魄。

(語類·卷六十五。黃義剛錄)

(12) 陰陽有相對而言者，如東陽西陰、南陽北陰是也。有錯綜而言者，如晝夜寒暑，一箇橫一箇直是也。伊川言，易變易也，只說得相對底陰陽流轉而已，不說錯綜底陰陽交互之理。言易，須兼此二意。

(語類·卷六十五。程端蒙錄)

(13) 陰陽有相對言者，如夫婦男女、東西南北是也。有錯綜言者，如晝夜、春夏秋冬、弦望晦朔，一箇間一箇軋去是也。

(語類·卷六十五。錄者不詳)

(14) 陰陽，論推行底只是一箇，對峙底則是兩箇，如日月水火之類是兩箇。

(語類·卷六十五。李方子錄)

(15) 體在天地後，用起天地先。對待底是體，流行底是用。體靜而用動。

(語類·卷六十五。程端蒙錄)

(16) 天地間，無兩立之理。非陰勝陽，即陽勝陰。無物不然，無時不然。

(語類·卷六十五。楊道夫錄)

(17) 橫渠言，陰聚之，陽必散之一段，却見得陰陽之情。

(語類·卷九十九。黃贊錄)

(18) 陰性凝聚，陽性發散。陰聚之，陽必散之，其勢均散。

(19) 器之間，程先生說感通之理。曰：如晝而夜，夜而復晝，循環不窮。所謂一動一靜，互爲其根，皆是感通之理。

(語類·卷七十二。錢木之錄)

(20) 凡在天地間，無非感應之理。造化與人事皆是。

(語類·卷七十二。徐寓錄)

(21) 問：程子說感應，在學者日用言之，則如何。曰：只因這一件事，又生出一件事，便是感與應。因第二件事，又生出第三件事，第二件事又是感，第三件事又是應。

(語類·卷七十二。陳淳錄)

(22) 林一之間，凡有動皆爲感，感則必有應。曰：如風來是感，樹動便是應。樹拽又是感，下面物動又是應。如晝極必感得夜來，夜極又便感得晝來。

(語類·卷七十二。錢木之錄)

(23) 春秋冬夏，只是一箇感應，所應復爲感，所感復爲應也。春夏是一箇大感，秋冬則必應之，而秋冬又爲春夏之感。以細言之，則春爲夏之感，夏則應春，而又爲秋之感。秋爲冬之感，冬則應秋，而又爲春之感。所以不窮也。

(語類·卷七十二。周謨錄)

また別に、

春爲感，夏爲應，秋爲感，冬爲應。若統論，春夏爲感，秋冬應，明

歲春夏又爲感。

(語類·卷一。鄭可學錄)

(24) 易字義，只是陰陽。

(語類·六十五。李閔祖錄)

(25) 龜山過黃亭詹季魯家。季魯問易。龜山取一張紙，畫箇圈子，用墨塗其半云，這便是易。此說極好。易只是一陰一陽做出許多般樣

(語類·卷六十五。晏淵錄)

(26) 大抵發生，都則是一箇陽氣，只是有消長。陽長一分，下面陰生一分，又不是討論陰來，即是陽消處便是陰，故陽其謂之復。(語類·卷六十五。葉賀孫錄)

(27) 諸公且試看。天地之間，別有甚事，只是陰與陽兩箇字。看是甚麼物事，都離不得。只就身上體看。纔開眼，不是陰便是陽。密拶拶在這裏，都不着得別物事。不是仁便是義，不是剛便是柔。只自家要做向前便是陽，纔收退便是陰意思。纔動便是陽，纔靜便是陰，未消別看。只是一動一靜，便是陰陽。伏羲只因此，畫卦以示人。若只就一陰一陽，又不足以該衆理。於是錯綜爲六十四卦，三百八十四爻。初只是許多卦交，後來聖人又繫許多辭在下。如他書，則元有這事，方說出這箇道理。易則未曾有此事，先假託都說在這裏。如書便有箇堯舜，有箇禹湯文武周公出來做許多事，便說許多事。今易則元未曾有聖人預先說出，待人占考。大事小事，無一能外於此。(語類·卷六十五。葉賀孫錄)

(28) 陽氣只是六層，只管上去，上盡後下面空缺處，便是陰。(語類·卷六十五。李方子錄)

(29) 天地間，只有六層。陽氣到地面上時，地下便冷了。只是這六位陽長，到那第六位時，極了無去處，上面只是漸次消了。上面消了些箇時，下面便生了些箇，那便是陰。(語類·卷六十五。蕭佐錄)

(30) 天地間，只是一箇氣。自今年冬至，到明年冬至，是他地氣周匝。把來折做兩截時，前面底便是陽，後面底便是陰。又折做四截也如此，便是四時。(語類·卷六十五。蕭佐錄)

(31) 謂陽生於子，於卦爲復，陰生於午，於卦爲姤者，曆家之說也。(朱文公文集·卷三十八。答遠機仲書)

(32) 論十二卦，則陽始於子，而終於巳，陰始於午，而終於亥。論四時之氣，則陽始於寅，而終於未，陰始於申，而終於丑。此二者說，雖若小差，而所爭不過二位，蓋子位，一陽雖生，而未出乎地。至寅位泰卦，則三陽之生，方出地上，而溫厚之氣，從此始焉。巳位乾卦，六陽雖極，而溫厚之氣未終，故午位，一陰雖生，而未害於陽。必至

未位遯卦，而後溫厚之氣始盡也。其午位，陰已生，而嚴凝之氣，及申方始。亥位，六陰雖極，而嚴凝之氣，至丑方盡，義亦放此。蓋地中之氣難見，而地上之氣易識，故周人以建子爲正，雖得天統，而孔子之論爲邦，乃以夏時爲正。蓋取其陰陽始終之著明也。按圖以推其說可見。(朱文公文集·卷三十八。答遠機仲別幅書)

(33) 用之云，地形如肺。形質雖硬，而中本虛，故陽氣升降乎其中，無所障礙，雖金石也透過去。地便承受得這氣，發育萬物。曰，然。要之，天形如一箇鼓鞀。天便是那鼓鞀外面皮殼子。中間包得許多氣，開闢消長，所以說乾一而實。地只是一箇物事，中間盡是這氣升降來往。緣中間虛，故容得這氣升降來往。以其包得地，所以說其質之大。以其容得天之氣，所以說其量之廣。非是說地之形有盡，故以量言也。只是說地盡容得天之氣，所以說其量之廣耳。(語類·卷七十四。沈憫錄)

(34) 又問，雷出地奮豫之後，六陽一半在地下，是天與地平分否。曰，若謂平分，則天却包着地在，此不必論。(語類·卷六十五。黃齋錄)

(35) 又云，看來，天地中間，此氣升降上下，當分爲六層。十一月冬至，自下面第一層生起，直到第六層，上極至天，是爲四月。陽氣既生足便消，下面陰氣便生。只是這一氣，升降循環不已，往來乎六層之中也。問，月令中天氣下降，地氣上騰，此又似天地各有氣相交合。曰，只是這一氣。只是陽極則消而陰生，陰極則消而陽生。天氣下降，便是冬至復卦之時，陽氣在下面生起，故云天氣下降。或曰，據此則却是陰消於上，而陽生於下，却見不得天氣下降。曰，也須是天連一轉，則陽氣在下，故從下生也。今以天運言之，則一日自轉一匝。然又有那大轉底時候。須是大著心腸看始得。不可拘一不通也。蓋天本是箇大底物事，以偏滯求他不得。(語類·卷七十四。沈憫錄)

(36) 想得春夏之間，天轉稍慢，故氣候緩散，昏昏然，而南方爲尤甚。至秋冬則天轉益急，故氣候清明，宇寅澄曠。所以說天高氣清，以其轉急而氣緊也。(語類·卷二。沈憫錄)

(37) 西北地至高。(語類·卷一。黃義剛錄)

- (38) 文昌雜錄記于闐遣使來貢獻，使者自言，其國之西千三百餘里即崑崙山。今中國在崑崙之東南，而天竺諸國在其正南。（語類·卷八十六·沈僩錄）
- (39) 大抵地之形如饅頭。其撚尖處則崑崙也。（同右）
- (40) 如極東處，日午以前須短，日午以後須長。極西處，日午以前須長，日午以後須短。（語類·卷八十六·黃翰錄）
- (41) 北方地形尖斜，日長而夜短。（語類·卷八十六·萬人傑錄）
- (42) 問，多風多陰之說。曰，今近東之地，自是多風。如海邊諸郡，風極多，每如期而至。如春必東風，夏必南風，不如此間之無定。蓋土地曠闊，無高山之限，故風各以方至。某舊在漳泉驗之。早間則風已生到午而盛，午後則風力漸微，至晚則更無一點風色，未嘗不差。蓋風隨陽氣生，日方升則陽氣生，至午則陽氣盛，午後則陽氣微，故風亦隨而盛衰。如西北邊多陰，非特山高障蔽之故，自是陽氣到彼處衰謝，蓋日到彼方午，則彼已甚晚，不久則落，故西邊不甚見日。古語云，蜀之日越之雪，言見日少也。所以蜀有漏天。古語云，巫峽多漏天，老杜云，鼓角漏天東，言其地常雨如天漏。然以此觀之，天地亦不甚闊。以日月所照及寒暑風陰觀之，可以驗矣。（語類·卷八十六·沈僩錄）
- (43) 如那有雪處，直是四五月後，雪不融，這便是所謂景朝多風處。便是日到那裏時，過午時，陽氣不甚厚，所以如此。所謂漏天處，皆在那裏。恁地便是天也不甚闊。只那裏已如此了，這是西南尚如此。若西北，想見寒過那秦鳳之間。想見寒如峨眉山。趙子直嘗登上面，煮粥更不熟，有箇孩子。時有季某者，凍得悶絕了。（語類·卷一百三十八·黃義剛錄）
- (44) 太平御覽·卷八引。
- (45) 同·卷九引。
- (46) 同·卷十五引。
- (47) 同·卷十引。
- (48) 同·卷十二及卷十四引。

- (49) 同·卷十二引。
- (50) 同·卷十三引。
- (51) 同·卷十四引。
- (52) 同·卷十二引。
- (53) 橫渠正蒙論風雷雲雨之說，最分曉。（語類·卷二·錢木之錄）
- (54) 橫渠云，陽爲陰累，則相持爲雨而降。陽氣正升，忽遇陰氣，則相持而下爲雨。蓋陽氣輕，陰氣重，故陽氣爲陰氣壓，墜而下也。（語類·卷九十九·沈僩錄）
- (55) 凡雨者，皆是陰氣盛，凝結得密，方濕潤下降爲雨。且如飯甑蓋得密了，氣鬱不通，四畔方有溫汗。（語類·卷七十·林學履錄）
- (56) 陰爲陽得，則飄揚爲雲而升。陰氣正升，忽遇陽氣，則助之飛騰，而上爲雲也。（語類·卷九十九·沈僩錄）
- (57) 密雲不雨，尙往也，是陰包他不住，陽氣更散，做雨不成，所以尙往也。（語類·卷七十·劉礪錄）
- (58) 陰氣凝聚，陽在內者不得出，則奮擊而爲雷霆。陽氣伏於陰氣之內不得出，故爆開而爲雷也。（語類·卷九十九·沈僩錄）
- (59) 雷如今之爆杖，蓋鬱積之極而迸散者也。（語類·卷二·李方子錄）
- (60) 雷者陰陽相軋，雷者陰陽相擊也。（河南程氏遺書·第二下）
- (61) 問，雷電，程子曰，只是氣相摩軋，是否。曰，然。
- (62) 朱子語類·卷九十九。楊至錄。
- (63) 陰陽之氣，閉結之極，忽然迸散出，做這雷雨。（語類·卷七十二·晁淵錄）
- (64) 陽在外者不得入，則周旋不舍而爲風。陰氣凝結於內，陽氣欲入不得，故旋轉其外不已而爲風。至吹散陰氣盡乃已也。（語類·卷九十九·沈僩錄）
- (65) 風只如天相似，不住旋轉。今此處無風，蓋或旋在那邊，或旋在上面，都不可知。夏多南風，冬多北風，此亦可見。（語類·卷二·輔廣錄）
- (66) 和而散則爲霜雪雨露，不和而散則爲戾氣噓霾。戾氣飛電之類，噓霾黃霧之類。皆陰陽邪惡不正之氣，所以電水穢濁，或青黑色。（語類·

卷九十九 沈偶錄

(67) 問、伊川云、露是金之氣。曰、露自是有清肅底氣象。古語云、露結爲霜。今觀之誠然。伊川云不然、不知何故。蓋露與霜之氣不同、露能滋物、霜能殺物也。又雪霜亦有異、霜則殺物、雪不能殺物也。雨與露亦不同、雨氣昏、露氣清。氣蒸而爲雨、如飯甑蒸之、其氣蒸騰而汗下淋漓、氣蒸而爲霧、如飯甑不蓋、氣散而不收。霧與露亦微有異、露氣肅而霧氣昏也。(語類・卷一百。沈偶錄)

(68) 霜只是露結成、雪只是雨結成。古人說、露是星月之氣、不然。今高山頂上、雖晴亦無露。露只是自下蒸上。人言、極西高山上、亦無雨雪。(語類・卷二。輔廣錄)

(69) 高山無霜霧、却有雪。某嘗登雲谷、晨起穿林薄中、並無露水沾衣。但見煙霞在下、茫然如大洋海、衆山僅露峯尖、煙雲環繞往來、山如移動。天下之奇觀也。或問、高山無霜霧、其理如何。曰、上面氣漸清、風漸緊、雖微有霧氣、都吹散了、所以不結。若雪則只是雨遇寒而凝、故高寒處雪先結也。道家有高處有萬里剛風之說、便是那裏氣清緊。低處則氣濁、故緩散。(語類・二。沈偶錄)

(70) 天氣降而地氣不接、則爲霧、地氣升而天氣不接、則爲露。(語類・卷九十九。楊至錄)

(71) 今電之兩頭、皆尖有稜道。疑得初間圓、上面陰陽交爭、打得如此碎了。電字從雨從包、是這氣包住、所以爲電也。(語類・卷二。錄者不詳)

(72) 岡田武松『氣象學の開拓者』、岩波書店、昭和二十四年、參照。

(73) 雪花所以必六出者、蓋只是霰下被猛風拍開、故成六出。如人擲一團爛泥於地、泥必潰錄成稜瓣也。又六者陰數、太陰玄精石亦六稜。蓋天地自然之數。(語類・卷二。沈偶錄)

(74) 天文學における觀測の重視も、これに結びつくであらう。

(75) 所以大雪爲豐年之兆者、雪非豐年、蓋爲凝結得陽氣在地、來年發達、生長萬物。(語類・卷二。游敬仲錄)

(76) 虹非能止雨也、而雨氣至是已薄、亦是日色射散雨氣了。(語類・卷

二。包揚錄)

(77) 如蠅蝨、本只是薄雨爲日照成影。(語類・卷二。黃義剛錄)

(78) 今治曆家、用律呂候氣。其法最精、氣之至也、分寸不差、便是這氣都在地中透上來。如十一月冬至、黃鍾管距地九寸、以蔑灰實其中。至之日、氣至灰去、晷刻不差。(語類・卷七十四。沈偶錄)

(79) 夢溪筆談・卷七・象數一。

(80) 問、龍行雨之說。曰、龍水物也。其出而與陽氣交蒸、故能成雨。但尋常雨、自是陰陽氣蒸鬱而成、非必龍之爲也。(語類・卷二。錢木之錄)

(81) 先生問、四明龍現事。璘答云、頃歲鄞縣趙公萬、禱雨于天井上之龍井、曾有龍現。張左藏良臣作記云、(中略)。曰、見玉嘉叟云、見龍初出水。先有物如蓮花之狀、而後水湧、異物出。兩眼光如銅盤、與趙尉所見頗合。(語類・一百三十八卷。陸璘錄)

(82) 河南程氏遺書・第十五。

(83) 伊川說、世間人說電是蜥蜴倣、初恐無是理、看來亦有之。只謂之全是蜥蜴倣、則不可耳。自有是上面結作成底、也有是蜥蜴。(語類・卷二。萬人傑錄)

(84) 正叔言、蜥蜴含水、隨雨震起。子厚言、未必然。電儘有大者、豈盡蜥蜴所致也。今以蜥蜴求雨、枉求他、他又何道致雨。正叔言、伯淳守官南方、長吏使往茅山請龍。辭之謂、祈請鬼神、當使信嚮者則有應、今先懷不信、便非義理。既到茅山岳、勅使人於水中捕得二龍持之歸、並無他異。復爲小兒玩之致死。此爲魚蝦之類、但形狀差異、如龍之狀爾。此蟲廣南亦有之。其形狀同、只鬚人有害、不如茅山不害人也。(河南程氏遺書・第十)

(85) 又此間王三哥之祖參議者云、嘗登五臺山、山極高寒、盛夏携綿被去。(中略)中夜之間寒甚、擁數牀綿被猶不煖。蓋山頂皆蜥蜴含水吐之爲電。少間風雨大作、所吐之電皆不見。明日下山則見。人言昨夜電大作。問皆如寺中所見者。(語類・卷二。萬人傑錄)

(86) 蜥蜴形狀亦如龍、是陰屬、是這氣相應、使作得他。如此正是陰陽

交爭之時、所以下電時必寒。(同右)

(87) 此理又不知如何造化。若用此物爲電、則造化亦小矣。(語類・卷二・包揚錄)

(88) 因論薛士龍家見鬼曰、世之信鬼神者、皆謂實有在天地間。其不信者、斷然以爲無鬼。然却又又有眞箇見者。鄭景望遂以薛氏所見爲實理、不知此特虹霓之類耳。必大因問、虹霓只是氣、還有形質。曰、既能吸水、亦必有腸肚、只纔散無了。如雷部神物亦此類。(語類・卷三・吳必大錄)

(89) 雷雖只是氣、但有氣便有形。如蟻蟻、本只是薄雨爲日所照成影、然亦有形、能吸水吸酒。(語類・卷二・黃義剛錄)

(90) 蔡季通云、人於雷所擊處、收得雷斧之屬。是一氣擊後、方始結成不是將這箇來打物。見人拾得石斧、如今斧之狀、似細黃石。(語類・

卷一百二十五・葉賀孫錄)

(91) 或以爲有神物。曰、氣聚則須有。然纔過便散。如雷斧之類、亦是氣聚而成者、但已有查滓便散不得。(語類・卷二・黃魯錄)

(92) 問、世俗所謂物怪神姦之說、則如何斷。曰、世俗大抵十分有八是胡說、二分亦有此理。(語類・卷六十三・陳淳錄)

(93) 河南程氏遺書・第二下。
(94) 理が價值概念である點については、山田「バターン・認識・制作

——中國科學の思想的風土」(廣重徹編『科學史のすすめ』筑摩書房、一九七〇年、一一九—一二二ページ)、參照。

(95) 後藤俊瑞『朱子の實踐哲學』(目黒書店、一九三七年)、二六六—二七〇ページ、および島田虔次『朱子學と陽明學』(岩波新書、一九六七年)、八四—八六ページ參照。